

プラハのおもちゃ博物館と国立技術博物館

井ノ口 淳三*

要 旨

チェコ共和国の首都プラハにある博物館の中から子どもの楽しむ2つの博物館を取り上げ、それらの特徴について考える。

プラハのおもちゃ博物館の特徴は、力仕事をする人たちに関する人形のおもちゃが数多く展示されていることである。バービー人形もかなりの数がまとまって展示されている。チェコらしくロボットの展示も目につく。

国立技術博物館では、輸送の歴史の展示スペースに注目したい。そこには交通博物館と共通する楽しみもあるし、異なる魅力も含まれている。

プラハには、これらの他にも市内交通博物館やプラハ市博物館、国立博物館など子どもも楽しめる博物館が幾つもある。

キーワード

おもちゃ博物館、国立技術博物館、市内交通博物館、プラハ市博物館、コメニウス博物館

1. おもちゃ博物館

チェコ共和国の首都プラハで子どもの楽しめる博物館といえば、まずおもちゃ博物館 (Museum Hraček, Toy Museum) を取り上げねばなるまい。それは、プラハ城の敷地内に有り、プラハを訪れる観光客なら誰もが見に行く聖ヴィート大聖堂や、カフカが一時期仕事場としていたこともある黄金小路を通り抜けた所にある。向い側の建物は、ロブコヴィツキー家の貴重な所蔵品を展示している宮殿である。

かつては無料で入場できたこれらの場所が、市場経済に移行した今では有料となっていることもあり、おもちゃ博物館の前を通っても通過するだけで中へ入らない人も多い。そのことは旅行者のブログを見ているとわかるのだが、ツアーならともかく個人旅行で時間の融通がつかう場合、ちょっとのぞいてみたい博物館である。

おもちゃ博物館の入り口が狭い階段で始まるのも敬遠される一因かも知れないのだが、これを昇りきったところに展示室の入り口がある。



おもちゃ博物館の建物へ入る門

建物の3階が入り口になっており、入場券売り場とショップがある。そこでは等身大のバービー人形とスーパーマンが出迎えてくれる。その先にロボットの展示ケースがある。ブリキのロボットが展示されているのは珍しくないが、実は「ロボット」はチェコ語から広まった言葉なのである。チェコの人気作家カレル・チャペックの戯曲で使われた robota (強制労働) が語源とされ

* 追手門学院大学国際教養学部

る。彼はチェコに伝わるゴーレム伝説にヒントを得てロボットを着想したと言われている。ゴーレムを連想させるロボットの展示があるのもチェコならではの。これらのロボットのすべてがチェコの製品かどうかはわからないが、ゴーレムのロボットはチェコ製ではなかろうか。



ロボットの展示

プラハのおもちゃ博物館には、2階に7部屋、3階に4部屋のあわせて11の部屋に80の展示スペースが備えられている。多くのおもちゃや人形の展示の中で特徴的なことは、働く人たちの人形の多いことである。駅や鉄道関係の仕事をしている人の人形は他でも見られるが、機械・器具を操作して大工仕事をする人やレンガを積んで建物を建設している人や煙突掃除をしている人などの人形は珍しい。機械・器具を1人で操作している人と2人で組になって動かしている人との両方が展示されているが、いずれの人形ものこぎりで切ったり穴をあけたりする作業の様子がよくわかるようになっている。軸の動



働く人の人形

きを操作することによって運動の方向を変化させる様子を見せているこれらの人形は、1900年前後に作られたものが多い。このタイプの人形の多さは、私の訪ねたおもちゃ博物館の中では随一であり、これがプラハのおもちゃ博物館の一番の特徴である。

おもちゃ博物館の上の階には4部屋あるが、それらのすべてはバービー人形の展示で占められており、その種類の多さに圧倒される。これらは2009年のバービー人形誕生50周年を記念した特別展で展示されたものであるが、今では常設展示されており、いつでも見ることができる。俳優や歌手などの人気スターの人形を入れ替えたり追加したりして、何度見てもあきない工夫がなされている。今回は、ドレス姿に着飾った女性たちに囲まれたアインシュタインの人形が目についた。

1963年から1964年、1968年から1970年までなど年代別に分けて人形を展示しているコーナーでは、制作年の違いによって人形の表情や衣装など微妙に印象が異なって見えるのも興味深い。



バービー人形

プラハのおもちゃ博物館は、ミュンヘンのそれと同様にイワン・シュタイガー (IVAN STEIGER) のコレクションによるものである。したがって、教会の祭壇を模した宗教的なおもちゃや古い時代の素朴な人形などミュンヘンと共通する展示も見られる。

けれどもミュンヘンには見られない展示として、数多くの働く人々のおもちゃやバービー人形がプラハには存在する。プラハのおもちゃ博物館は、これらの展示を特色とするユニークな場所である。

2. 国立技術博物館

おもちゃ博物館を出てすぐ先に見えるプラハ城の東門から坂道を下りていくと、マラー・ストラナ（小地区）の電車通りに出てくる。そこから市電の12番に乗って坂道を上ると、途中からお城の方向とは別れて進んでいく。広大なレトナー公園やサッカー場を過ぎた所に国立技術博物館（Národní Technické Muzeum, National Technical Museum）の最寄りの停留所がある。

建物は、国立美術館の一部門であるヴェレトゥルジュニー・パラーツと同様の機能主義建築であり、見た目の好みは分かれるとしても、多くの収蔵品を保管し、展示するには都合の良い設計である。多種多様な様式の建築物が存在しているところから「建築博物館の街」とも称されるプラハにとっては、これも建築物の1例として意味があるのかも知れない。

ここを訪ねる人の誰もが最初に行くところが、切符売り場の先にある輸送の歴史の展示スペースである。吹き抜けの広い場所には歴史的な蒸気機関車、気球、飛行機、自動車などが置かれている。2階から4階までの回廊には、オートバイや自転車の実物、乗り物のエンジンやハンドルなどの部品、輸送の変遷の歴史を示す模型などの展示がある。

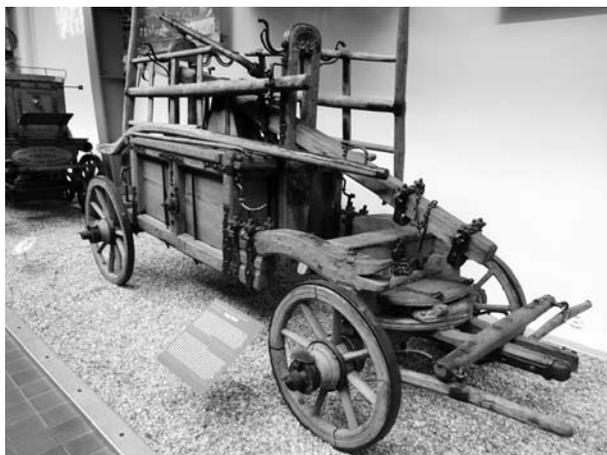


輸送の歴史の展示スペース

私が興味を持ったのは、昔の消防自動車が何種類も並んでいたことで、中でも1795年に製作されたという木製の消防馬車には驚いた。それほど古いようには見えなかったのですが、複製品かどうかを係の人に尋ねたところ、「1820年にポンプを新しく取り替えたが、18世紀後半のものだ」という説明であった。これは20世紀前半まで

活躍したそうである。桶の中に水を貯めておき、現場に着くと2人でポンプを上下に操作して放水する仕組みである。

陳列された消防馬車とは別の消防自動車が消防署から出動する様子がフィルムで映し出されていたが、スクリーンは建物の白壁を利用していた。



木製の消防馬車

以上のような輸送の歴史の展示だけなら他の交通博物館でも見ることができるだろうが、ここは技術博物館なので、天文学、写真、化学、印刷、時計、冶金学、採掘、家庭電化製品などの分野について、それぞれの歴史的な変遷のわかる実物や模型が部屋ごとに区分されて展示されている。地上4階、地下3階の大きな建物なので、テレビ・スタジオや図書室、レストランやホールもあり、展示を見て回るのにも時間がかかるが、主な展示は1階に集中しているので、時間に余裕のない時にはそこから見て回ると良いだろう。

この博物館が天文学の展示に力を入れているのは、ティコ・ブラーエやケプラーがプラハに移住していたこととも関係があるものと思われる。ケプラーの住んでいた家はカレル橋のたもとに残っており、お城の近くには2人の銅像も建てられている。

また、ガラスの製造過程の展示があるのもボヘミア・ガラスを特産品とするチェコの博物館らしい。

クラシックなカメラや時計の展示は、それらに関心のある人にとって垂涎的であろうが、大人に人気のあったのは、科学の原理を使ってゲームを楽しむコーナーであった。ゲーム・センターのような場所を見かけないプラハでは、電気エネルギーを使って反応を楽しむ幾つ

かの装置は珍しいものであり、常に順番を待つ人がいた。床の上のボタンを踏むと光の棒が方向を変え、その光を相手より早くゴールに運ぶゲームは見ていてもおもしろく、まわりの人は待っている間に遊びのルールを理解しているようだった。



声の出し方で盤面を操作するゲーム

もちろん子どもにも国立技術博物館は人気があり、私が最初にここを知ったのは、35年ほど前に子どもたちと読んだ童話による。プラハ近郊の村に住む1年生のビーテクは、1人でプラハのおばあちゃんのところへ遊びに行く。おばあちゃんが案内してくれた場所の1つが技術

博物館で、ここでの少年のお気に入りには自転車だった。

3. その他の博物館

プラハには立派な国立博物館があるのだが、2011年7月以来工事中であり、2018年に再開される予定である。7年もかけて改築されるのであるから、どのようなものに生まれ変わるのか期待したい。

他に子どもの楽しむ博物館には、市内交通博物館がある。これは、市電、バス、トロリーバスなど日常生活におなじみの交通機関に限定した博物館である。

久しく訪ねていないが、プラハ市博物館に展示されている旧市街のジオラマは、とてもリアルに出来ていて、子どもたちに人気のある展示の1つである。

最後にコメニウス博物館は、これまでに15回ほど訪ねているが、2015年2月に訪ねた時は全館リニューアル工事中であり、バンコヴァー館長から改築後の展示の模様を伺った。プラハのコメニウス博物館は、近年徐々に展示スペースが拡張され、展示内容も充実してきているので再訪が楽しみである。

チェコの各地にあるコメニウス博物館は、教育関係の展示を中心としており、子どもの来館者も多い。これらについては稿を改めて記すことにしたい。

引用・参考文献

井ノ口淳三 (2013) 「ミュンヘンのおもちゃ博物館と人形劇博物館」本誌『Musa 博物館学芸員課程年報』第27号
ボフミル・ジーハ、井出弘子訳 (1980) 『ビーテクのひとりたび』童心社

本稿に関連するホームページを参照されたい。

| | |
|----------|---|
| おもちゃ博物館 | http://www.prague.eu/en/object/places/522/toy-museum |
| 国立技術博物館 | http://www.ntm.cz/en |
| 国立博物館 | http://www.nm.cz/ |
| 市内交通博物館 | http://www.dpp.cz/en/urban-mass-transit-museum/ |
| プラハ市博物館 | http://en.muzeumprahy.cz/ |
| コメニウス博物館 | http://npmk.cz/ |